Tales Of Legendia Another Apocalypse

大佐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｔａｌｅｓ　Ｏｆ　Ｌｅｇｅｎｄｉａ　Ａｎｏｔｈｅｒ　Ａｐｏｃａｌｙｐｓｅ

【Ｎコード】

Ｎ６２６７Ｚ

【作者名】

大佐

【あらすじ】

クルザンド王統国軍と聖ガドリア王国の戦争はすでに２０年以上経過していた。その戦いの中、２人の男女が出会い、そして２人は１つの大陸を渦巻く、巨大な相手との戦いを多くの仲間たちとともに潜り抜けていくことになる。

ー第1話ー（前書き）

テイルズオブシリーズとエースコンバット。これまでコラボされることのなかった2つの作品をコラボし、更に独自の世界観を構築していきました。純粋にテイルズとかエースコンバットか考えず、1つの物語として読んでいただければ幸いです。因みにＨＡＬＯはオマケ程度です

―第１話―

……いつの世も、些細な行き違いから悲劇が生まれる物である。２０年の長きにわたる戦争も、その悲劇の１つであっただろう。

聖歴９８０年から続く戦争は、一般的には２０年戦争、或いはガドリア戦争と言われる。それは、２国の主役のうちの一方の国名を関したものであり、同時に最初に戦争の口火を切った側に対する、一種のあてつけであっただろう。そもそも、戦争が発生した経緯を考えれば、あまりの馬鹿馬鹿しさに誰もが呆れかえる。

事の発端は聖歴９５６年に発生した１つの事件に起因するが、それ以前にも大きな緊張関係そのものはあった。クルザンド王統国が、当時無政府地帯に蔓延っていた盗賊団討伐の為に軍を派遣し、討伐に成功したのち、その領土を自らの国の領土と定めた。後にイーリオス州と呼ばれるその地域は、だがその直後に聖ガドリア王国が、その地域の領有権を唱えたのだ。その土地はかつて、聖ガドリア王国の宗主国である源聖レクサリア皇国の領土であり、そして聖ガドリア王国には、その領土を継承する義務があるという物であった。

無論、この論法はあまりにも粗雑であったし、またその地域自体も、クルザンド王統国が建国される以前に存在した大国オーシア連邦の領土であったのだ。確かに無政府地帯となって久しい地域であったが、それだけに誰が自国の領土としてもおかしくない環境だったのである。にも拘らずガドリア側がその土地をよこせと言ってくる。無論それは聞きいられないものであり、クルザンド王統国政府は、当然、その要求を拒否した。

この程度の小競り合いは、実のところ今までも数多くあった。政治的な解決策は常に、最終的には譲歩という形で終わってきたのだ。そしてこの場合、ガドリア王国側が譲歩したようにクルザンド政府側は考えた。実際、ガドリア王国は２４年間、抗議はすれども武力を用いる事はなかった。ガドリア王国はその地政学上から軍事力に

力を注いできた国家であったが、むやみやたらに好戦的というわけではなかったのだ。そのため、最終的にはこのまま、うやむやのままに終わると誰もが考えていたのだ。

その希望的観測は、聖歴９８０年に破られることになる。その前年に発生したイーリオス事件を契機に、ガドリア軍が退去としてイーリオス州に攻め込んだのだ。それに対して、クルザンド軍は満足な迎撃ができず、隣接するエリシオン州に撤退することになる。当初は、そのままイーリオス州を手に入れたガドリア側が矛を収めるのではないかと思われていた。戦争を仕掛けた大義名分が、そのイーリオス州の奪還であったからだ。それ以上の不要な戦火の拡大を望まない。そう思われていた。ところが、ガドリア軍は更にエリシオン州に攻め込んだのである。

「劣等民族オーシアンを滅ぼし、世界を永続させよ！」

これが彼らのスローガンだった。気が付けば、本来ならば小さな領土問題であったはずのそれが、聖ガドリア王国とクルザンド王統国の全面戦争に発展し、そして両国は主にイーリオス州を舞台に殺し合った。ひたすらに殺し合い、そして聖歴９９５年にクルザンド軍がイーリオス州を奪還することに成功する以外、その戦争は常に硬直状態だったのだ。

無論、それを両国は望まなかった。長きにわたる戦争は、両国の経済を破壊し、崩壊へと導いていくものである。聖ガドリア王国は宗主国である源聖レクサリア王国に救いの手を求め、クルザンド王統国はかつてオーシア連邦という１つの国家であった時の同胞であったエメリア共和国の経済的援助と、ベルカ公国をはじめとした傭兵派遣を生業とする国家に軍事力を支えられながら戦い続けてきたのである。

各国はこの２国の戦争によって利益を得たが、その一方で戦争終結のために手を撃たなかったわけではない。特にオーシア連邦を構

成し、そして分裂した各国にとって、クルザンド王統国がこのまま戦い、そしてガドリアの手によって滅亡させられてしまうということは、そのまま自国の運命がそれに追随すると考えた。そしてそれは紛れもない事実であったのだ。レクサリア系の人間たちとオーシア系の人間たちの間には拭い難いほどの格差があったのだ。ガドリア人やクルザンド人、そしてその戦争に傭兵として参加した者たちは、敵国人に対しての差別意識を次第に敵に対する敬意に変えていくことができたが、実際に戦ったことがないものはその差別意識をより増して行った。レクサリア近衛軍司令官エド・カーチスは、自国の将軍たちがその地位にふさわしくない罵詈雑言を重ねていくのに辟易し、だがそれを批判することができないほどに国内の民族主義は沸騰していたのである。まるで活火山が噴火する直前の活発な活動にさえ似ていたかもしれない。

そうした、収集を付けたくともそう簡単につけられそうにない状況の中、聖歴１０００年３月、ガドリア軍は４万の兵力を率いてイーリオス州を目指した。そして、この戦争の趨勢を決める出会い、そしてその後の世界の運命を決める出会いが起こることになる。場所はイーリオス州の東北の町、ディレスタでのことだった

―聖歴１０００年３月１５日―
―クルザンド王統国　イーリオス州　ディレスタ上空―

－１０時２３分－

その日の空は、非常に雲がぶ厚かった。
おそらくこのまま雲が発達すれば積乱雲に発展するかもしれないほどに感じられる。だが、雲の上は当然快晴で、青い空がどこまでも続いている。眼下の地上では、人間同士が戦っていることなど、この世界の小さな出来事として忘れ去ってしまいたいほどだ。
青い空と地上の間に広がるぶ厚い雲は、まるで白い絨毯だ。そしてその絨毯の上を、３匹のドラゴンが、それ１人ずつ人間をその背に乗せていた。雲の凹凸にそって飛ぶその３匹は、本来であれば非常に希少な魔物であったし、そもそも人間を背中に乗せて飛ぶような性格をしているはずがない。本来ドラゴンは気性が荒い魔物であり、人間など乗せて飛び回る様なことはせず、寧ろその背に乗った人間を食らいつくしてしまうはずであった。
だが、ドラゴンは人間に従順であった。人間に無理矢理飛ばされているわけではなく、ドラゴンたちは自分たちの意思で飛行している。そして、その３匹の先頭を飛ぶドラゴンの背に乗る男性が、右手親指と人差し指を首に、正確には、首に装着している物に触れた。

「ＡＷＡＣＳ、状況報告を」

『此方ＡＷＡＣＳドラゴンアイ。ディレスタ上空は雲が低い。両軍の戦闘は市街地で継続中』

それは無線通信によるものだった。３匹のドラゴンの後方６０キロの地点に浮かぶ飛行船。それは上空から部隊を指揮するために設けられた空中管制船と呼ばれるものだった。
通常、指揮官は地上で兵士たちを指揮統括する。これまではそれが当然だと思われていたが、この空中管制船を運用しているクルザンド王統国軍では考え方が違っていた。というのも、陸上から状況

を判断して友軍部隊に情報を伝達するのは非常に困難だからだ。無線も障害物があれば届かず、かといって伝令は時間がかかる上に敵に捕らえられたりあるいは敵の流れ弾に撃たれて死亡するケースも多い。特に兵力数の劣るクルザンド王統国軍では部隊間連携が特に重要になる。少しでもタイムロスをなくし、なおかつ正確な情報を伝達させるためには、飛行船の運用が必須だったのだ。

無論、飛行船の運用にはデメリットもある。それは飛行船が兵器としてはあまりにも脆弱なものだということだ。少しでも炎上するような事態が発生すれば、飛行船は大爆発を起こす。しかも地上から容易に撃墜できることから、飛行船は軍用に適さないと判断されてこれまでどこの国も使わなかったのだ。逆に言えば、容易に撃墜されてしまうというデメリットを無視してでも導入を決めたクルザンド王統国軍側の厳しい状況を浮き彫りにしてしまう物かもしれない。

だが、前線に投入するのではなく、後方で指揮官が指示を出すために用いるのであれば、寧ろ飛行船は最適の兵器と言えた。そしてこの時、空中管制船ドラゴンアイの機内では、地上軍と空を飛ぶドラゴンに乗る兵士の情報がリアルタイムで把握できていた。

『再度、作戦を確認する。諸君らは敵軍後方に強襲空挺を行い、敵野戦砲を撃破することが任務だ。他には目もくれるな』

「ラジャー」

先頭を飛ぶドラゴンに乗る兵士は非常に若かった。年齢からすれば、まだ２０歳にも達していない。その兵士は状況をしっかりと把握し、後方の２人にも指示を出す。そしてその２人は女性で、また２人とも男性兵士と同年代に見えた。

だが、この若い３人の兵士が、実はクルザンド運の特殊作戦群に所属しているということを知れば、ガドリア軍はついに人材の枯渇

が特殊部隊にまで及んだかと呆れてしまうかもしれない。だが、それが事実であった。唯一ガドリア軍がこの若い兵士たちを見て勘違いするであろうことは、彼らには実戦経験があまりないと思い込んでしまうことかもしれない。だが、この3人は前線での戦闘経験を5年以上積んだ精鋭であったのだ。

「そろそろ効果地点に到達するな……2人とも、準備はいいな？」

『いつでもどうぞ、少尉』

『同じくいけます』

凛とした声と、やや淡いおっとりした声が男性兵士の耳に届いた。2人を見てうなずいたこの若い兵士は、ドラゴンアイに報告する。

「ファントムよりドラゴンアイ。これより突入を開始する」

『了解。ラファールの姿を敵に見られないようにしてくれ』

「了解。行くぞ！」

ドラゴン3体が左側に大きく傾き、そして一気に急降下する。低い雲の中に飛び込み、そしてそこから抜けるとすぐに地面だ。ドラゴンはすぐに水平飛行に戻る。

3人は町の建築物を遮蔽物として、敵軍に接近していく。砲撃音が響き渡る中、その砲声がする方に向けてドラゴンたちは建造物の間を飛ぶのだ。そしてある程度接近してから、ドラゴンは急停止して地面に3人を降ろす。ドラゴンたちの存在を敵に見せるわけにはいかないため、ここからは徒歩だ。

「此方ファントム。降下完了した。位置はディレスタの南東だ。敵砲兵の現在位置は？」

『そこから北東1キロの地点だ。兵力は不明』

「了解。デラ、リン。行くぞ」

青年は2人の名を呼んで右手で合図する。2人の兵士はそれにしたがって、周囲を警戒しながら彼の後に続いた。

黒い長髪と緑色の瞳が特徴的なデライラ・フランズベルク准尉と、髪の毛を襟もとで切りそろえてまとめて束ねている黒い瞳のリン・グレーファ准尉、そしてこの2人を率いる立場にいる、銀髪でヒスイ色の瞳を持ったセネル・クーリッジ・ケラーマン少尉。この3人が、今回の作戦の中核隊員だった。面白いことに、この3人のうち、1人は国籍が違う。セネルとリンはクルザンド人だが、デライラだけはベルカ国籍、つまり傭兵だったのだ。

通常、多国籍の傭兵を特殊作戦群に加えるようなことはしない。だが、クルザンド王統国ではむしろ積極的に外国人傭兵を自国軍の特殊部隊に加えていた。これは、クルザンド王統国軍が傭兵によって前線を支え続けていることの裏返しでもあった。自国の兵士は前線勤務よりも後方の兵站維持などの任務に対応し、前線投入される数は決して多くない。戦後のことを見据えて、極力自国民の犠牲者を減らそうというクルザンド側の戦略思想だ。

そうした傭兵の多いクルザンド軍で、だが前線兵士の平均年齢の極端な低下は顕著だった。3人とも17歳で、本来であれば前線に投入するのではなく、後方で訓練などをしている年齢だ。だが、セネルとリンは12歳から、デライラは14歳の時から戦場を経験している。17歳という年齢は、実はこの戦争に限って言えば若い兵士とは言えない熟練した兵士だ。そして彼らはその熟練した兵士らしく、1キロの距離を、敵に出くわすことなく移動しきって見せた。

「……珍しいな」

セネルが敵の砲兵陣地を観察する。双眼鏡で見ると、どうも敵の護衛の中に女性が混ざっているように見える。

クルザンド軍では、才能さえあれば男性だろうが女性だろうが構わず前線に投入するが、ガドリア軍では女性を前線に送り込むことはまずない。前線の戦いは男性ものものだという風潮がいまだに残っているからだ。だからガドリア軍で女性が、後方の陣地とはいえ前線にいるのは珍しいことだ。

「……とはいえ、あの砲は潰さないとな。行くぞ」

セネルがトレンチコートの中から6本のスローイングナイフを、両手の指の間に挟むように取り出し、そして敵兵に向けその全てを投げた。投げられたナイフは、カルバリン砲という大砲に砲弾を込めようとした兵士と、それらを護衛する兵士の首に当たる。喉を貫き、頸動脈を切り裂いた。6人を一瞬で片づけ、それを合図としたように3人が残る敵兵に向けて突進する。

「敵！？　どこから！？」

ガドリア兵の1人が驚き、それに対してセネルは再びナイフを投げた。恐ろしいほどの唸りを上げてナイフが敵兵の右目を貫く。勢いが強すぎて、右目から後頭部にナイフが飛び出して貫いたほどだ。続いてナイフを投げる、ということはセネルはしない。すでにナイフを投げて攻撃するような間合いではなくなっていたからだ。

セネルは両手に大型のナイフ、リンは鉄棍、そしてデライラはレイピアを手に取って敵兵を攻撃する。ガドリア兵も剣を抜いて詰め寄ってきて、セネルに向け剣を振り下ろした。

彼はそれをまともに受けるような真似はしなかった。彼の銀髪が数本宙に舞う程度で、彼はそれを躱したのだ。ガドリア兵は勢いよく剣を振ったために重心が前のめりになってしまう。セネルはその隙を見逃さず、相手の首にナイフを突き入れる。

突き入れられたナイフは、首を貫通し、続いて水平に流れた。敵の首に差し込まれていたナイフが自由になり、別の敵兵に向けられる。相手はやや離れた位置に降り、少なくともナイフは届かない、はずだった。

「魔神拳！」

セネルの右拳が唸りを挙げながら振り上げられると、突然衝撃波が現れて、それがガドリア兵を襲う。甲冑に直撃し、しかもそれを容易に砕いた。ガドリア兵がもんどりうって仰向けに倒れて、上半身を起こそうとしたとき、すでにセネルは間合いを詰め、ナイフを首に突き刺した。

慈悲のない攻撃は、同時にカルバリン砲を扱う兵士たちをひるませる。護衛の兵はともかく、砲兵というのは白兵戦に慣れていない。つまり、護衛の兵を圧倒するほどの敵兵あが現れたと知れば、彼らは砲を捨てて逃げるしかない。砲兵に白兵戦を得意とする相手と叩けというのはあまりにも無謀だ。

セネルはその事をよく知っていた。だから彼は敵兵をあえて残酷に、そして圧倒的な力の差があると見えるようにして斃していく。そうすれば、最終的に彼らが手を下す相手の数は少なくなるだろう。彼はそう考えたのだ。

だが、彼自身、敵の戦力を完全に読み切っているわけではない。突然、彼の左手側から剣が襲いかかってきたのだ。彼はそれを紙一重で回避する。その剣を振ってきたのは、先ほど見かけた黒髪の女性騎士だった。驚くほどの俊敏なのは、ふつう騎士がに身にまとっている鎧をあえて着用せず、その分素早く動き回れるようにした、

特徴的な装備によるものだろう。

「成程……」

セネルはどうして、この女性騎士が前線にいるのか理解した。この女性騎士はかなり腕が立つ。男性は全身に甲冑を身にまとっているが、この女性は身にまとわず、その剣の素早さによって防御を行っている。だがそれ以上に驚きなのは、その若さだ。自分たちと同年代に見える。もし女性がいても、さすがに自分たちと同じ年代の女性騎士がいるなんて思わなかったのだ。先ほどは遠目だったため、女性とわかってもそれ以上は分からなかったから。

だが、自分と同年代だからと言って手加減する必要を彼は認めない。というよりも、相手にしようとしなかった。セネルは一瞬その女性に突進するように見せて相手を構えさせる。だが、そのままセネルは彼女の脇をすり抜け、カルバリン砲に突っ込んだのだ。

「させるか！　魔神剣！」

セネルの背後から轟音が聞こえ、セネルは反射的に横に跳ぶ。先ほどまでセネルがいた場所を、彼が放つ魔神券と同様の衝撃波が突き抜けた。

「よりによって爪術士かよ……」

セネルが思わず呟く。爪術士、それは非常に数が少ないが、戦闘などで非常に有利な能力を持つ人間のことを言う。その力を使うときには指先が眩く光ることから爪術士という通称を付けられている。セネルもリンもデライラも爪術士だが、まさかあの女性騎士まで爪術士とは予想外だった。

爪術士を相手に背後を見せるのは危険だった。だが、その女性騎

士とセネルの間に、デライラが割り込んだ。まだリンは敵と戦っている最中でこっちに来るだけの余裕はない。

「すまんが頼む」

「了解」

デライラの返事を聞いて、セネルは素早くカルバリン砲に迫る。すでに砲兵は逃げ出して、そこにあるのは動かしようのないカルバリン砲だけだった。セネルはその砲身を、なんとナイフで両断してしまったのだ。カルバリン砲は砲身を完全に破壊してしまえば再利用することはできない。運ぶ時の車輪や台座を破壊したところですぐに修理されてしまうが、砲身はそういうわけにはいかないのだ。

カルバリン砲がすべて両断されて、セネルはデライラの方を見た。そちらの方ではすでに決着がついており、剣を弾き飛ばされ、デライラが相手の首過ぎにレイピアを添えている。もし少しでも不穏な動きをすれば即座に突き刺す構えだ。なのだが、どうもデライラは困っているように見える。相手の女性騎士が、この状況でやけに堂々としているからだ。

「えーと……観念しない？」

「断る！　私を討つなら早く討て」

「あのー……少尉、どうしましょう？」

「……はあ。お前が守る対象はもうなくなったんだ、諦めて降参しろ」

「うっ……むう……」

セネルは呆れた。どうも、彼女は殺されたがっているというより、この状況に追い込んで自分を殺そうとしない此方を不思議に思っている節がある。こちらとしては敵の砲兵をつぶしたことで任務は完了しているから、必要以上に敵を殺める必要はない。第一、武器を失った騎士を相手にしているほどの暇はない。

「デラ、さっさとここから逃げるぞ。彼女は放っておけ」

「了解」

デライラはレイピアを下げ、自分の鞘に入れる。だが女性騎士は余計に混乱した。

「お、お前たちは我がガドリア兵を必ず殺すのではないのか？」

「……どうしてそうなる」

「だ、だって騎士学校では……」

一体ガドリアの騎士学校ではどんな教育をしているんだと思わずセネルは問い詰めたくなった。敵国だし、多少屈折したことを教えているだろうとは思っていたのだが、まさか捕虜を取らずに皆殺しにしているという風に教えられているとは心外だ。

セネルがやや呆れ顔で、デライラの方に接近する。だが次の瞬間、彼はその足を止めた。

「少尉？」

「野郎……リン、こっちにこい！　デラは氷を張れ！」

セネルに言われ、リンが残った敵兵を吹き飛ばしてこっちに走ってくる。女性騎士は何が起こったのかまるで分からない。分かるのは、先ほどまで自分の首筋にレイピアを突き付けていた少女が、レイピアを鞘から引き抜いて地面に刺し、そして3人の敵と、彼女自身を氷の壁で包み込んだということだけだ。

氷の壁が、前後左右どころか頭上まで覆い隠してしまう。刹那、彼女は不気味な風切り音を聞いた。訳が分からず、だが彼女は、鉄棍をふるっていた女性に自分の頭を抱えられた。

「な、何を――」

「いいから伏せて！」

少女の言葉の最後に爆発音が重なった。少女はなぜ、この3人が氷を張り、固まったのか理解した。この銀髪の青年が砲撃音を聞き、すぐに防御態勢を取ったのだ。数発の砲弾が周囲に着弾し、耳をつんざくような砲声が響き渡る。

「……落ち着きましたね」

「くそ、敵主力からの砲撃か。これ以上ここにいたら死ぬな」

少々無駄に長居をしてしまったらしい。セネルはそう感じ、2人に大急ぎでこの場を離れるように指示を出す。氷が割れ、3人あ一斉に走り出す直前、女性騎士が3人に声をかけた。

「何故私を助けた？」

「たまたま近くにいたからだ」

これはまったくの事実なので、セネルとしてはどうでもいいだろ言いたげな表情で言った。そんなことよりも、まずはこの場から逃げなければならない。恐らくガドリア軍は味方が全滅したという風に思い込んで、続けて砲撃してくるだろう。

「お前も早く逃げろ。死にたくなければな」

「お、お前とか言うな！　私はクロエ・ヴァレンスだ！」

「ヴァレンス？　あのヴァレンスか？」

「そ、そうだが……」

セネルが驚いたような表情を見せる。クロエ・ヴァレンスと名乗った少女は、どうやら自分、というより自分の家の名前を相手が知っているということに気が付いた。ただ、セネルの視線は、どちらかというとどうしてだ？　という風な疑問の表情に近かっただろう。だがそれもすぐに、消える。

「じゃあクロエ、早く東に逃げろ。味方の砲撃で吹き飛ばされたくなければな」

そう言って、セネルは足早にその場を後にする。クロエ・ヴァレンスはやや不満顔で、だが敵兵の言うとおりに、その場から逃げることを選ばざるを得なかった。

これが、まさか今後の歴史に大きく関与することになる2人の、初めての出会いであろうとは、この時2人は思いもしなかった……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6267z/

Tales Of Legendia Another Apocalypse

2011年12月20日23時47分発行